

今宵あなたをオトします！

目次

今宵あなたをオトします！

5

番外編 愛いとしい君と、幸せの味

273

今宵あなたをオトします！

心の宝箱に仕舞って、誰にも教えたくない大切な思い出がある。

あれは去年の秋。夏のうだるような暑さがようやく和らいだ頃、私——本多天音は会社に忘れ物をして取りに戻っていた。

警備員のおじさんに頼み込んで裏口の扉を開けてもらい、そつと足を踏み入れる。

足音をつい潜めてしまったのは、きつと変なものをおびき寄せたくなかったからだ。例えば幽霊とか、オバケとか。

二十三という歳で何を、と笑われてしまうかもしれないが、夜の社内は昼と違って妙に怖くて、まるで夜の学校だった。肝試しを企画したら意外と人気が出るかもしれない。

……真つ暗な給湯室からぼたりぼたりと水音が聞こえてきそう、廊下の奥では数字を取れない営業マンの霊が「契約くれエ」と怨嗟の呻き声を上げていそう。想像が恐怖を生み出し、恐々とした足取りで廊下の角を曲がる。

そこで、営業部フロアに明かりがついているのに気づいた。

こんな夜中に、誰かいるのかな？

音を立てないように扉を少し開けて、中を窺う。すると、男の人がデスクに向かって仕事をしている。プレゼンに向けた準備をしているのか、机には資料やサンプルが山積みになっている。

……あの人は。

私は目を丸くした。まさか『あの人』が孤独に居残りしているなんて思ってもみなかったから。

彼の名は高柳幸人。私と同じ営業部二課の所属で、同期でもある。でも彼の肩書きはそれだけじゃない。

私たちが勤める高柳繊維ロジスティクス株式会社の社長令息なのだ。

当時鳴り物入りで入社した彼の姿はすっかりと覚えている。入社式でも、ひときわ目立っていたから。全てにおいて恵まれた彼は、苦労なんて一つもしたことがないんだろうと、少し妬ましく思ったことも覚えている。

そんな高柳さんが、一人で居残りをしていたとは。

必死になって仕事をしなくても、将来はそれなりのポストが用意されるはず。彼は頑張らなくてもいい人間なのだ。でも、彼の営業成績はいつもよかった。

高柳さんはコネだけの人間ではない。入社当初こそ一部の社員からナナヒカリと陰口を叩かれていたけれど、常に実力で結果を出してきた。次第に、彼を悪く言う人間はいなくなった。

それは全て、陰で努力していたからこそだろう。

穏やかで優しい、王子様みたいな高柳さん。けれどその夜は、普段の彼からは想像もできないほど苦悩した姿を見せていた。

片手で額を押さえながら、ノートにガリガリと何か書いている。資料をめくり、クロスサンプルの質感を確かめて、孤独にパソコンを打つ。結果を出そうと懸命になっている。

ドキドキと胸が高鳴った。体中が熱を帯びて、心がふわりと浮き立つ。

——私は高柳幸人に恋をしたのだと、この時はつきり自覚した。

さて、恋を自覚したはいいものの、早くも立ちほだかった超難関に、私は四苦八苦ししていた。

何せ相手は御曹司。高柳社長の三男に当たると。高校から大学までアメリカで過ごしたという彼は、ハリウッド俳優もかくやというほどの美貌で、人のよさそうな笑顔が似合う爽やかなイケメンだ。

誰に対しても分け隔てなく親切で、社員のみならず取引先の好感度も高い、我が社きつてのアイドル君である。営業成績の伸びもいい彼を嫌うのは、今や嫉妬にまみれた一部の男くらいなものだろう。

それだけの魅力をお持ちの高柳さんは、当然だけど女性社員から絶大な人気を誇っていた。

高柳繊維ロジスティクスは国内はおろか海外にも進出しており、未だ成長を続けている大企業。その社長令息というだけでも十分価値がある。その上、顔がよくて性格までよかったら、そりゃあもう倍率は高くて当たり前だ。

対して私は顔も頭脳も普通。体力はちよつと自信あるかな。でもアスリートほどではないから、あくまで普通の域を超えることはない。

人より秀でた特技があるわけでもなし、あつと驚く超能力を持っているわけでもなし。悲しく

なってしまうほどの平凡人間だった。もうホント、こんな一流企業によく入社できたな、と自身に感心してしまう。

しかもこの歳になるまで恋愛事に縁がなく、男性経験ゼロ。

そんなわけで、私が真つ向から高柳さんにアプローチしたところで、同じように彼を狙う『その他大勢』と一緒にたにされるのが関の山だろう。

シンデレラが王子様に見初められたのは、美人だったからだ。美人でない私は、シンデレラになるのがとても難しい。それこそ宝くじに当たるとかくらいの幸運がなければ無理だろうと、誰よりも私が自覚していた。

「ほんと毎回、皆飽きもせずよくやるよねー」

先輩でありよき親友でもある総務部経理課の宮村江美さんが、社員食堂の端でテーブルに頬杖をつきながら笑っていた。私はよろよろした足取りで、彼女のもとへと戻る。

手に持っているのは二種類のお弁当。今日、高柳さんが社員食堂で昼食を取ることを知っていた私は、彼に手作りのお弁当を差し入れるべく、早起きして超頑張ったのだ。しかし……

「何で毎回、声をかけることすら許されないの!？」

そう、私は敗者である。今回も高柳さんに声をかけることができなかった。

高柳さんが社内です食を食べるのは、基本的に月末の営業会議の日と、毎週月曜日にある二課ミーティングの日だけ。その情報は会社中に知れ渡っているため、いつも社員食堂がエライことになる。カレーや日替わり定食を頼もうとする高柳さんを捕まえてお弁当を渡し、お昼をご一緒しよ

うと狙う女性社員たちが、ハイエナのごとく群がるのだ。

「一種の風物詩だよね、アレ」

あははと気楽に笑うのは、江美さんをはじめとした、高柳さんに興味のない社員たち。一方、我々高柳幸人を狙う女たちは、懲りもせず見苦しい抗争を繰り広げている。

ちなみに、高柳さんは一度もお弁当を受け取ったことがない。やんわりと断り、普通にカレーとか定食とかを注文して食べている。それでも女たちは諦めない。彼の隣や向かいや斜め向かいや後ろや、とにかく周りに座って話しかけようと、阿鼻叫喚の椅子取り大会が始まるのだ。

……ほんと、モテるって大変だと思う。そんな肉食女子たちに囲まれても和やかに笑顔で応じる高柳さんは、もはや菩薩レベルの男と言っているだろう。悟りの一つや二つ開いていないと、あんなに愛想を振りまくことはできない。

私も毎回、頑張ってはいるのだ。無駄だとわかっているけど「お弁当食べてくれませんか」と言いたい。でも私のような平凡人間は、その一言をかけることすら許されなかった。

なぜなら、高柳さんの周りには鉄壁部隊がいるからだ。営業部一課と秘書課の女性で構成された部隊は美人揃いで、高柳さんに声をかけたいハイエナ（私含む）を、ことごとく蹴散らしてしまうのである。「あなたごときが、高柳君に声をかけていいと思ってるの?」と。

いわゆる取り巻きだ。私たちのようなパツとしない一般女子は高柳さんに声をかける前に、彼女らに軽くあしらわれる。あんまり逆らうと鬼のイジメを食らうらしいし、円滑な会社生活を送るために、そこまで無謀になることはできない。

ともあれ、お祭り騒ぎのようなひと時は一瞬で終了した。敗者たちはスゴスゴと引き下がり、食堂のどこかでお弁当を食べる。その一人である私も江美さんの向かいに座って、二つあるお弁当のうちの一つを彼女に渡した。

「やったー！ 私、高柳君が食堂で昼食取る日が楽しみなんだよね」

「昼食代が浮きますものね……」

「うん！ どれどれ、今日の天音のお弁当はどんなかな」

ニコニコと笑顔でお弁当の包みをほどく江美さんも、一年前までは営業部二課で事務をしていた。私は彼女の後任であり、入社当初から半年にわたって仕事を教えてもらったのだ。私たちはとても気が合って、今や彼女は三つ年上の親友となっている。色々相談に乗ってもらったり、昼食を一緒に取ったり、休日に遊んだり、私にとって頼れるお姉さんの存在だ。

私も自分のお弁当の包みをほどく。ばかりとフタを開けると、中には黒ごまを振った俵おにぎりが三つと、渾身の卵焼き、手作りハンバーグ、ポテトサラダ、彩りを添えるためにプチトマトが二つ入っている。

「毎回ちゃんと作って偉いよね。冷凍食品一つもないし」

「そりゃまあ、一応高柳さんにあげるつもりで作ってるんだし、さすがに手抜きはしないですよ」
「え、噂によると、結構手抜きしてる子多いっばいよ? だって高柳君、一度もお弁当受け取ったことないし。無駄だとわかっているから、適当に詰めてる子もいるって」

「もしかしたら、いつか気が変わって受け取ってくれるかもしれないじゃないですか。まあ……な

いでしょうけど」

受け取つてもらうどころか、高柳さんに声をかけることすらできない。御曹司を狙うってこんなにも大変なんだなあ。そりゃまあ、もし彼に見初められたら一躍シンデレラなわけだし、皆必死になって当たり前だと思うけど、同時に不毛だなあとも思う。

「そういえば、うちには御曹司がもう一人いますよね」

「ああ、高柳課長ね」

プチトマトを一つ摘まみながら、江美さんがそつけなく答える。

「つて、自分の上司でしょう？ あの人もこんな風で大騒ぎされてたんですか？」

そう、うちの会社には社長令息がもう一人勤めているのだ。長男である高柳要一。彼は総務部経理課の課長を務めており、江美さんにとつては直属の上司に当たる。私は部署が違うので滅多に会うことはないけど、廊下などで見かけると、驚くほどの美形だなあと感心してしまう。三男の幸人さんがあれだけ顔がいいのだから、兄も当たり前のように眉目秀麗なのだ。

シャープなメタルフレームの眼鏡がよく似合う彼は、今年三十歳で、硬質な格好よさを持つ。幸人さんと違って、愛想がないところが玉に瑕だ。ちなみに次男は、噂によると弁護士らしい。

「私が入社した頃はすごかったよ。ここだけの話だけど、高柳君の取り巻きをしている営業一課と秘書課の人たちってね、最初は課長の取り巻きしてたんだよ。でも課長って昔からああでさ、終始仏頂面で態度も堅物そのものだから、愛想のいい三男君が入社した途端、皆そつちに鞍替えしたんだよね」

「……そ、そうなんですか？ 軽う……」

悪口みただから声を潜めつつも、私はチラリと後ろを見てしまった。ニコニコ顔で日替わり定食を口にする高柳さんに、取り巻きの人たちはキャッキヤと話しかけている。

卵焼きをぱくつと食べた江美さんが、くすくす笑った。

「こんなこと言ったら高柳君に悪いけど、課長は清々してるんじゃないかな。彼女たち、ほんつとにしつこかったもん。そんなに玉の輿って乗りたいのかな。正直、絶対面倒くさいと思うよ？」

「そうですね、私もそう思うんですけど……」

もし玉の輿に乗れたとしても、その後どんなことが待ち受けているのか、想像もつかない。ぱく、と力なくハンバーグを食べた。我ながらウマイ。レシピはネットで調べただけだ。

諦めが悪いなあど、自分でも思っている。高柳さんに恋をしてから様々なことを試して、ことごとく玉碎してきたのだ。

仕事終わりを狙ってお食事に誘おうとしたものの、彼が営業フロアを出た瞬間、同じようなことを考えた女性社員たちに囲まれていた。逆に出社前に声をかけたらいいんじゃないかと思って会社前で待ち伏せしたら、彼がやってきた時、すでに周りに人垣ができていた。

もう何なの。磁石でも内蔵しているのか御曹司。

そう思ってしまうほど、彼には常にバリアーがついている。女の群れという名のバリアーが。

諦めの悪い私もさすがに挫折しかけていた。入社当初から彼を狙っていたという人たちの中にも、最近では諦める人が出てきているらしい。

何せ営業部一課と秘書課で構成された、あの鉄壁部隊がいるから……。美人で気が強くて下手を打つとイジメや嫌がらせをしてくるから、彼女らを恐れて諦める人が多いのかもしれない。

あの夜がきっかけで高柳さんを好きになったけど、彼はまさに高嶺の花だ。同じ課なのに近づくことすらできないなんて、本当に悲しい。

「私もさ、天音の恋を応援してあげたいって思うよ。でも、やっぱり諦めたほうがいいんじゃないかな。よしんば仲よくなれたとしても、女の嫉妬がすごそうだし」

「……うん」

最後の俵おにぎりを食べて、お弁当を片付ける。江美さんもお弁当を食べ終わり、「ごちそう様でした」と手を合わせた。

「こうやってせっかとおいしいお弁当を作っても、私のお腹に入っちゃうんだし。潔く諦めて、別の人を好きになったほうがいいんじゃない？　せめて鉄壁部隊がいないような人とか」

「それはわかっているんですけど……。でも、あと一回だけチャレンジしてみることにします」

江美さんからお弁当を回収しつつ、私はかねてからの決意を口にする。江美さんは不思議そうに「チャレンジ？」と首を傾げた。

私が勤める高柳繊維ロジスティクス株式会社は、主に繊維資材や生地製品を扱う商社だ。国内の要所に支店を置き、海外進出にも積極的で、めざましい成長を遂げている。就活生の人気も高い。私のような平凡人間がこんな大企業に新卒採用されたことは、たぐいまれなる幸運だろう。つまり、この会社に入社した時点で、私は運を使い果たしているのだ。

高嶺の花に恋をしたところで、成就できるべくもない。

だけど私は、最後のチャンスに懸けることにした。これで駄目だったら、もはや打つ手はない。つらいけど、この恋は私の身の丈に合わなかったということ、自ら幕を引くしかないだろう。

「本多さん、これ今週分の経費請求書です。それからギザ七十スモースの大ロットを近々出荷する予定です、倉庫管理部に手配をお願いしますか？」

「はい、わかりました」

今日も高柳さんから仕事を受け取る。いつも変わらない優しい笑顔に、耳にじわりと残る低い声。そして見飽きることもない素敵なお顔。

……こうやって毎日高柳さんと顔を合わせて、ほんの少し会話ができるところは、二課の営業事務という立場ならではの利点だろう。ただし仕事の話しかできない。当たり前だけど、他の営業さんを相手にする時とまったく同じやりとりである。

正直、ちよつとくらい世間話をして罰は当たらないと思うのだ。しかし、私は徹底して仕事にプライベートを持ち込まないようにしている。というのも、入社してほどなく鉄壁部隊……もとい取り巻きの皆様に呼び出されてしまったことがあるのだ。

「同じ課だからって調子に乗るんじゃないよ。仕事中に色目なんか使ったら、すぐあんたの上司に報告して、会社にいられなくしてやるからね」

はつきり言って脅しだった。新人相手に大人げない人たちである。だが、その頃の私はまだ高柳

さんに恋していなかった。「わかりましたー」と適当に返事しておいた。

それからしばらくの間、一課の取り巻きの方々から鬼のような目で監視されていたけれど、本当に仕事上のやりとりしかしない私を見て、彼女らも安心したらしい。だんだんと敵視されることもなくなつて、私は今の平穩な会社生活を手に入れた。

けれど、もし仕事中に高柳さんを誘うような真似をすれば、一転して立場が悪くなるであろうことは想像に難くない。それに彼女らのことがなくても、仕事中に浮ついた話ではできなかった。高柳さんは優しい人だけど、同時にとても真面目な人なのだ。彼を落胆させるような真似は絶対できない。

つまり、社内で彼を誘うことは無理だった。昼休みはあんな状態だし、出退社時もまったく話しかけられない。

そんな私に大きなチャンスが訪れた。

今日は営業部の壮行会がある。二課の営業マンが支社へ異動することになったため、営業部だけで飲み会を行う。他部署の人間が参加するのは禁止されているので、今回こそ高柳さんとお話できるかもしれないのだ。

鉄壁部隊のメンバーである一課の先輩たちがちよつと怖い……でも、そんなの怖がっていたら勝負なんかできない。仕事ならともかく、飲み会での行動にまでケチをつけられるいわれはない。

——私は今宵、高柳さんを誘つて口説いてみせるのだ。

仕事が終わつた後、ロッカールームで念入りに化粧を直し、髪の毛をヘアアイロンで巻く。服装は控えめなビジュウのついた萌黄色のニットアンサンブルに、膝下丈の白いフレアスカート。仕事場では会社規定の事務服を着ているので、今日は高柳さんに私服を披露するまたとないチャンスだ。昨日は必死に爪を磨いた上、サンゴと白の二色を使ってネイルを仕上げた。靴はスカートの色と合わせた白のパンプス。ストッキングに伝線はない。うん、完璧だ。

ロッカールームを後にして、ポケットから取り出したのは、二つ折りにしたメモ用紙。

飲み会で堂々と高柳さんに声をかけるつもりはない。彼の隣は一課の先輩たちが陣取つて、周りを牽制しているだろう。昼食時と変わらず、まともに話しかけることすらできないはずだ。

でも会社の飲み会となれば、お酌して回つたり他の社員や上司と話したりと、彼女らも高柳さんにつきつきりというわけにはいかない。つまり必ずスキが生まれる。

私はそのチャンスを虎視眈々と待ち、メモ用紙を高柳さんのポケットに忍ばせるのだ。

メモには宴会の後に飲み直しませんかという誘いの文句と、お店の場所が書いてある。飲み会の会場から歩いて五分のバーだけど、横道にそれたところにあるから目立たない。

一度下見に行つて、店内の雰囲気やメニューも確認した。御曹司を誘うにはちよつと地味なお店かもしれないけど、落ち着いた雰囲気だしテーブル席もあるので、ゆっくり話をするのに向いている。あそこなら、口説くの最適だろう。

幸いなことに、高柳さんは私を知っている。毎日仕事で顔を合わせているのだから当然だ。つまり、名前も知らない相手に誘われるより警戒心は薄いはず。これで彼が来なかつたら、それは振り

れたも同然ということだ。潔く諦めよう。
私はぐっとお腹に力を入れて、意気揚々と戦場に赴いたのだった。

…：それなのに、どうしてこうなるの？

がっくりと肩を落として、宴会会場の端っことでビールを飲む。そんな私の隣では、江美さんが気だるそうに枝豆を摘まんでいた。

何で営業部の飲み会に総務部の江美さんがいるのか。それは営業部の壮行会が急遽、総務部との合同宴会になったからだ。

総務部の飲み会とたまたま会場が同じで、しかも隣同士の大部屋だった。それなら一緒に飲み会したほうが盛り上がりやすいよ、と上層部が余計なことを言ったせいで、大部屋の仕切りが外されてしまったのだ。

当然、高柳さんの周りは秘書課と営業部一課の取り巻きたちがガッチリ固めている。我々のような木っ端女は、彼女らに睨まれて近づくことすらできない。皆、端々で悔しげに酒を呷るのみだ。

「何だろね、あの人たち。高柳君のSPでも気取ってるのかな」

「あー、何か納得です。あれで黒服黒サングラスだったら、完全にSPですよね」

「当の高柳君はどう思ってるんだろ。鬱陶しいって思わないのかな」

二人で枝豆を摘まみながら、遙か遠くにいる高柳さんを見つめる。彼は今日もニコニコと穏やかな笑みを浮かべていて、取り巻きたちからかわるがわるお酌されていた。

「普通、モテる男は同性から響意を買うものだけど、あそこまでがちり取り巻かれると、かえって同情されそうだよね」

「そうですね。それにしても、はあ……」

げんなりしてため息をつく。今日こそ勝負しようよ、はりきってお洒落したのにな。

私の心中を察したのか、江美さんが笑って自分のグラスを私のグラスにカチンと当ててくる。

「そう落ち込むなって。今日の天音は可愛いよ」

「ありがとうございますー」

「気合入れたんだねえ、ホントに高柳君が好きなんだねえ」

「うん……。でも、やっぱり私にとっては高嶺の花なんでしょうね」

シンデレラなんて簡単になれるものじゃない。それはわかっていたけど、ここまで手が届かないと虚しさが募る。きつと私だけじゃなく、多くの人たちがそう思っているのだろう。

高柳さんは結局、あの取り巻きの中から恋人を選ぶのかな。悔しいけど彼女らは美人だから、私よりもずっとシンデレラになれる確率が高いのかもしれない。

残り少なくなったビールをぐぐつと飲み込む。すると私の隣に、誰かがドツカリと座ってきた。

あまりの遠慮のなさに嫌な予感がしつつ横を向くと、そこにいたのは赤ら顔をしたオジサン……もとい、営業部三課の伍島課長だった。

「おう、飲んでるかね、本多君ー」

「は、はあ……。まあ、それなりに」

彼が喋ると辺りが一気に酒くさくなり、私は頭が痛くなった。さりげなく彼から顔をそむけると、江美さんはすでに明後日のほうを向いてお酒を飲んでいる。本気で関わりたくないのだろう。

伍島課長は営業部の中で一番嫌われていると言っても過言ではない。何せその口から発せられる言葉の多くがセクハラに該当するし、嫌味も多い。仕事の指示も要領を得ない上、言い方が常に偉そうなのだ。

私も伍島課長は苦手だった。私は三課ではなく二課の事務だというのに、半年ほど前からやたらと話しかけてくる。はつきり言って、困り果てていた。

「いやあ、本多君は新しい仕事を任されて、いつも忙しそうだね。しかしそれだけ営業事務として期待されていることなのだから、より一層励むようにな」

「ありがとうございます。頑張ります」

はは、と軽く笑っていると、彼がこれみよがしに空になったグラスをクイクイ上下させた。ビールを注ぎということらしい。非常にめんどくさいけど、これも仕事みたいなのだろう。

私はトホホと思いつつビールを注ぐ。早く飲んで早く酔っぱらって早く潰れていただきたい。

「君みたいに若い娘は、励むものが色々あって大変だなあ」

「はあ、色々……ですか？」

「日中は仕事だろうが、夜にも励むものがあるだろう？」

「……」

げらげら笑う課長の横で、げんなりしつつ頭を抱える。

隣では江美さんも額に手を当てていた。あからさまな下ネタに頭痛を感じているのだろう。

「ご、伍島課長はずいぶんと酔っていらつしやいますね。何かいいことでもあったんですか？」

必殺・話題そらしてセクハラを回避する。

彼はぐびぐびとビールを飲み、ぶはあと息を吐いた。

「君が仕事を真面目にしてくれているだけで、私にはたくさんいいことが起きるんだよ」

何だそれは。意味がわからない。私は二課の仕事をしているだけだし、三課の課長が得をする理由なんてないと思うけど。それとも営業部全体の話をしているのかな？ 酔っ払いとの会話は成立しないことが多いから、非常に疲れる。

「今月もよろしく頼むよ。ウチの阪上から仕事を回すからねえ」

「ああ……エコ業務のことですね。わかりました」

阪上さんというのは、三課の営業事務をしている女性だ。こんなオジサンの下についているのに文句一つ言わない、とても真面目な社員さんである。

半年前から私はエコロジーに関する仕事を一つ任されていて、その書類は伍島課長や阪上さんを経由し、毎月私に回ってくる。彼がやたらと絡んでくるようになったのは、私とその仕事を任せられてからだ。

もしかするとエコ業務に関することで、伍島課長は上に褒められたのかもしれない。どうして書類を回すだけの彼が褒められて、実際に仕事している私が褒められないのか非常に気になるどころだけど、それが会社というものなのだろう。

何にしても、今日は色々とさんざんだ。せつかく考えた計画はおじゃんになるし、挙句の果てには伍島課長にお酌を強要されるし……。これはもうトコトン飲むしかない、半ばヤケになった私は、店員さんにおかわりを頼むのだった。

……ちよつと飲みすぎたかもしれない。

お手洗いから出たところで、よろりと壁に寄りかかると。あれから江美さんと仕事の愚痴を言い合ったり、周りの営業マンや総務のオジサンたちにお酌したりしていたら、すっかり酔っぱらってしまった。

まあいいか、別にこの後用事があるわけでもなし。アパートに帰って寝るだけだ。

そう思っていたのに、隣のお手洗いからひよこつと高柳さんが現れた。

「ひよえっ!？」

驚きのあまり変な声が出る。まさかここで彼と会うなんて！

高柳さんは壁に寄りかかる私に気づき「あれ？」と首を傾げた。

「本多さん、大丈夫ですか。もしかして飲みすぎてしまいましたか？」

私のような平凡女にも優しい高柳さん。ほんとに菩薩のような人だ……。あれだけモテるのだから、少しくらい横柄になってもおかしくないのに、いつも控えめで紳士で、良心の塊みたいな性格をしている。

思わずぼやーつと見蕩れてしまつてから、ハツとした。

これはチャンスじゃないだろうか。今、彼のそばにはあの鉄壁部隊が一人もいない。それどころか、まるで神様が奇跡をくれたように、私たちは二人きりだった。

今だ、今しかない。今渡すべきだ！

私はポケットから二つ折りのメモ用紙を取り出す。ぐつと握りしめ、彼の胸に押しつけた。

「えっ?」

「これ、あの、読んでください！」

渾身の勇気を振り絞つて声を出す。やつと仕事以外で彼に声をかけることができた。嬉しいけれど、きつと私の顔は真っ赤になっているだろう。

いつも笑顔の高柳さんが、少し戸惑った顔をしている。そんな彼をジッと見つめてから、私は足早に宴会会場へと戻った。

ドキドキと胸が高鳴っている。あまりの緊張に、体中から汗が出てきそう。

高柳さんはメモを読んでくれるかな。少なくとも、そのまま捨てることはないと思いたい。彼は優しい人だから。

ちやんとお洒落してよかった。ヘアアイロンで髪の毛を巻いてよかった。平凡一直線な私だけど、少しでも好印象を持ってくれたら嬉しい。

自分の席に戻ると、江美さんが焼酎の水割りを飲んでいた。

「手紙、渡せましたよ」

興奮気味に小声で報告したら、江美さんは驚いた顔をした。でも、すぐに笑顔に変わり、「やつ

たね！」と背中を叩いてくれる。

嬉しいけどちょっと痛い。人のことは言えないが、江美さんも相当酔っぱらっていた……

宴えんもたけなわ。壮行会の主役である営業マンが挨拶あいさつをして、皆で拍手する。彼は長年勤めた本社を離れ、支店で役職につくのだ。酔っぱらった上役が「全員で万歳三唱！」とか言い出して、私たち事務員はドン引きしつつ半笑いで万歳する。上役たちはついに社歌まで歌い出して、恥ずかしくなった部下たちが彼らを追い立てるように解散の流れとなった。

二次会に行く人、そのまま帰る人。皆がそれぞれの行動を取り始める中、私は一人こそそとバーに向かう。こういう時、目立たないのは便利だ。私は誰の目にも留まることなく横道へ入り込こんだ。

ぼんやりした照明が灯るバーの入り口。その前で彼を待つ。

……来るかな、来ないかな。高柳さんは男女関係なく人気がある人だから、間違まちがいなく二次会に誘よわれているだろう。たくさんの会社仲間と、たった一人の私。優先順位で言うなら間違まちがいなく前者が上だ。つまり私のお誘よいに乗のってくれる確率は、限りなく低いということ。

でも、後悔はしていない。やっとアプローチすることができた。自分でチャンスを作ることができた。今までは取り巻きたちに阻はまれて、声をかけることすらできなかったけど、ようやく私は彼女らを出し抜ぬいたのだ。

うん、それだけでも大きな成果だろう。私は恋をして、できる限りのことをやった。

……十分、二十分。

腕時計を時々見て、刻々と過ぎる時間のため息をつく。細い路地すぢから見上げると、建物の隙間すきまに夜空があつた。星が見えないのは、ここが繁華街だからだろう。

……三十分。

まあそうだろうなと思っおもてはいたけれど、やっぱり高柳さんは来ない。きっと彼は二次会を優先ゆうけんしたので。取り巻きの皆様も当然たうぜんついていつているはず。

よし、飲もう。せっかく後ろにバーがあるんだし、今日は一人でヤケ酒やけしゅしてぐーすか寝よう。明日は休みなんだから、何も遠慮えんりょすることはない。

そうと決まればいざお酒と、バーのドアレバーつかを掴つかんだ時――

「お待たせして、すみません」

後ろから、耳に心地よい低音が聞こえた。

「ええっ!？」

ぐるっと振り返ると、目の前に立たっていたのは、あの高柳幸人さん。

私は目を大きく見開き、口をばくばくさせる。

だって、ほんとに高柳さんが来た。私のお誘よいに乗のってくれるなんて信じられない。もしや影武者かげむしやだろうか。御曹司おせうじに影武者かげむしやっているのかな。

口をあめぐり開ける私の前で、高柳さんは不思議そうに首を傾かげている。そんな仕草一つ取とつてもやたら絵になるのは、彼の姿があまりに素敵だからだろう。

「どうかしましたか？ 本多さん」

「あつ、えつ……あのつ！ に、二次会は!?」

思わずどうでもいいことを尋ねていた。呼び出したのはこちらなのに、頭の中がかかつてないほど混乱している。高柳さんは「ああ」と言つて、困つたような笑みを浮かべた。

「お断りしたんですが、なかなか許してもらえませんでした。だからここへ来るのに時間がかかつてしまつて。本当にすみません」

二度も謝られたので、私は慌てて手を振つた。御曹司おんそうしに謝らせるなんてとんでもない。

「だ、大丈夫です。こちらこそお誘いしてごめんなさい。でも来てくれて嬉しいですよ」

「そう言つてもらえると、僕も本多さんのお誘いに乗つてよかつたと思います。では、入りましようか」

「はいっ！」

私が元氣よく返事をすると、高柳さんにはっこり笑つてバーのドアを開けてくれた。このさりげないエスコートぶりが紳士たる所以ゆゑんだ。

半ばなか夢心地でバーの店内に入ると、金曜の夜だというのに客は少ない。私たちは空いていたテーブル席に向かい合わせで座つた。

「何を頼もうかな。せっかくのバーだから、カクテルを飲んでみたいですね」

「……あの、こういう普通のバーみたいところで、大丈夫でしたか？ 高柳さんは、銀座の高級バーとかのほうが行き慣れているんじゃない？」

「そんなことありません。僕は滅多に銀座には行きませんよ？ このお店は落ち着いた雰囲気で居心地がいいです。逆に意外でしたね、本多さんはこういうところが好みなんですか？」

優しく微笑み、会話を楽しむように話しかけてくる高柳さん。こんなにもフレンドリーに接してもらえるのは初めてだから、つい舞い上がつてしまふ。

「わ、私もここは二回目なんです。たまたま見つけて……いいなつて思つただけで。実はカクテルもお酒も、全然詳しくないんです」

緊張のあまり、言葉がカクカクしている。きつと顔も真っ赤になっているだろう。宴会での酔いが戻ってきたかのように体が熱くて、頭の中がぐらぐらした。

「じゃあ、僕が頼みましょうか。本多さんには甘くて飲みやすいカクテルがいいでしょうから」

「はい、よろしくお願いします」

高柳さんが勧めてくれるなら、そのへんの水道水でもおいしく飲めると思う。店員さんにカクテルを二つ頼んだ高柳さんは、少しリラックステイルのようにテーブルの上でゆつくりと手を組んだ。私は緊張して下を向きながら、チラチラと彼の顔を盗み見る。

何か、何か話題を振らないと。これは神様がくれた我が人生最大のチャンスなのだから、大いに有効活用せねばならない。

彼女はいるのでしょうか？ ああいや、いきなりその質問は不躰ぶしよだよな。

ここはやつぱり、無難に好きな食べ物とか、ご趣味とか？

そんなことを悶々もんもんと考えるうち、コトツとテーブルにカクテルが置かれた。私の目の前にあるの

は、紅茶色をしたロングカクテルだ。

「これは、何というカクテルなんですか？」

「ロングアイランドアイステイラーです。さっぱりした甘さがあるので、きつと飲みやすいと思いますよ。僕はミモザを頼みました」

高柳さんの私と同じ、ロングタイプのカクテル。明るいオレンジ色で、フルーティな香りがふわりとした。

乾杯、と二人でグラスを合わせる。……夢みたい。夢じゃないよね？

高柳さんがグラスを傾けたので、私も慌てて一口飲む。

「わっ、おいしい……です」

びっくりするほど、そのカクテルはおいしかった。すつと喉に入り込むような甘さがあり、飲み口が優しくて、アルコールを飲んでいる感じがしない。お花みたいな上品な香りがロマンティックな気持ちにさせる、素敵な飲み物だ。

カクテルなんて全然知らないけど、こんなにおいしいものなんだあと感動しつつ、ココククと飲み下す。宴会ではビールばかり飲んでいたので、余計においしく感じられた。

「びっくりしましたよ。本多さんがお誘いしてくれるなんて思いもしませんでしたから。意外と積極的なんですわ」

「わ、私もびっくりしました。まさか本当に……高柳さんが来てくれるなんて、思わなかったのよ……」

カクテルをもう一口飲んで、ジッと彼を見つめる。まだ現実味がない。夢の中にいるみたいふわふわしていて、これは私の壮大なる妄想なのかと疑ってしまう。

だけど目の前の高柳さんは、間違いない本物だった。彼はくすくすと笑って優しく目を細める。

「他の女性からのお誘いならお断りしたかもしれません、本多さんは別ですよ」

「そっ、そうなんですか？」

思わず目を丸くする。私は別……つまり特別ということ？

「だって同じ課で働く仲間じゃないですか。それに、本多さんはいつも真面目で仕事も丁寧なので、素敵な方だなと思っていました」

褒めすぎだ。褒めすぎだよ高柳さん。私を舞い上がらせてどうするつもりなんですか。もしかして王子様ともなると、誰に対してもこれくらいのセリフは朝飯前であらうしやるのでしょうか。

どうしよう。いや、悩んでいる場合ではない。とにかく言うこと言って、聞くこと聞いてしまわなければ。このチャンスをもノにして、絶対に口説き落とししまわなければ！

酔ってぐらぐらする頭に活を入れ、ドンツとテーブルに拳を打ちつける。

「たかやーぎさん！」

「大丈夫ですか？ ろれつが回っていませんけど」

「大丈夫です！ あの、高柳さんは、か、彼女とかいるんですか！」

ようやく聞けた。でも口にしてしまっただけから、「やはり好きな食べ物を先に聞くべきだったか」と少し後悔する。彼は私の不躰な質問にも気を悪くした様子を見せず、ジェントリな笑みを浮かべ

たままこくりとミモザを飲んだ。

「特定の恋人のことですか？ それならいませぬね」

「では、生まれた時から決められていた、フィアンセがいるとか……」

「あははっ、そんな方がいたらドラマみたいですね。でも、残念ながいませぬよ」

ニコニコしながら素直に答えてくれる。やっぱり高柳さんはいいい人だ。

とにかく今は、彼女も婚約者もいないらしい。それなら、私が告白しても構わないってことだよ。言うだけならタダだもん。どれだけ平凡でも身のほど知らずでも、気持ち伝えることは罪じゃない。高柳さんの取り巻きは絶対に許さないうけど、彼女らに遠慮する必要など一つもない！

「たかやぎさん！」

「はい。いよいよよろれつが回ってませぬね」

ドツドツと心臓が脈打っている。手にじつとりと汗をかきつつ、ありったけの思いを込めて高柳さんを見つめた。

これが夢じゃないなら、神様がくれた奇跡なら、私は彼に伝えたい。大衆の中の一人に過ぎないちっぽけな私の、大切な思いを。

「私は、あなたのことが好きです」

言えた……。やつと言えた。この一言が言いたくて、私は渡すこともできないお弁当を作り続け、女性社員の群れにまみれて四苦八苦していたのだ。

後悔なんて一つもしていない。胸の中がすっきりして、告白できてよかったと心から思う。

高柳さんは面白そうに目を丸くして、私をまじまじと見つめた。

何を考えているんだろう。嬉しいと思っているのかな、それとも断る言葉を探しているのかな。

高柳さんは思いやりのある人だから、きっと私の心が傷つかないように、優しい言葉を選んでくれることだろう。

「……うーん……」

顎に指を添えて伏し目がちになる高柳さん。そんなアンニュイな表情も非常に絵になる。

「すみません。とりあえず、お酒のおかわりを頼んでもいいですか？」

「あ、はい。私もおかわりを……。お、お任せしてもいいですか？」

カクテルを急いで飲み切ってから聞いてみると、高柳さんは笑顔で「もちろんですよ」と言ってくれた。

しばらくして、私の前には深い琥珀色のカクテルが置かれた。これは何という名前のカクテルなんだろう。きれいな色をしている。試しに一口飲んでみると、とろけるように甘くてほんのりオレンジの風味がした。

高柳さんはワイン色のカクテルを手に持ち、言葉を吟味するようにゆっくりと口を開く。

「先ほどメモをいただいた時にも思ったのですが、本多さんはずいぶんストレートな方なんですな」

「迷惑……でしたか？」

おずおずと聞いてみる。すると高柳さんは穏やかな表情で「いいえ」と首を横に振った。

「とてもまつすぐな方なんだな、と好感を持ちました」

「こ、好感……とは？」

「ありていに言いますと、僕もあなたに興味があります」

彼はにっこりと微笑む。その笑顔は会社で見るとの表情よりも素敵でドキドキした。軽くカクテルを口にし、流し目を送ってくる様は色気があって、私はうろたえてしまう。

どうしよう。ひょっとして、このままうまくいっちゃうの？

まさか……でも、そんな目で見つめられると期待してしまう。

「僕のが好きだと仰る本多さん。あなたは、僕とお付き合いたいのでしょうか？」

バーに入っても、どこか夢心地だった。告白を口にしても、まだ現実味がなかった。彼とお付き合いでできるだなんて、まったく予想していなかったからかもしれない。

きつと私は、心のどこかで諦めていたのだ。彼は高嶺の花だと。手の届かない王子様なのだ。それでも自分という存在が彼を好きなのだと思つてほしかった。私はおそらく、そこで願望を終わらせていたんだ。

……告白した後のことなんて、まったく考えていなかった。それが今の夢心地の理由なのだろう。いつか夢はさめる。この奇跡みたいな時間は、彼のお断りの言葉によつて終わりを告げるのだと思つていた。

でも、なぜか夢は続いている。高柳さんが私に興味を持つてくれている。

それなら、私は――

「お付き合いしていたら、願つてもない……ことです」

ふわふわしていて、思考がうまく働かない。でも、自分の思ひは口にできたと思う。

力の入らない手でカクテルグラスをテーブルに置いた。優しく甘い、高柳さんみたいな味のお酒は、私に心地よい眠気をもたらす。このまま横になれたら幸せだけど、目の前には高柳さんがいるし、何より外だし、どうにかして帰らなきゃ。

「本多さんは本当に可愛いことを仰いますね。そんな風に求められると、僕もついその気になつてしまいますよ」

「その気に……？ 好きになつてくれる、ということですか？」

「そうですね。僕はあなたを、もっと知りたい」

私の手の上に、彼の手がそつと置かれる。優しい目の奥に、赤い炎のような熱を見た。聖人君子然とした高柳さんにもそういう欲があるのだと……何となく意外に思つてしまう。

だけど私を見つめる高柳さんは、仕事場では見たことがない艶めかしさがあって、心をとろとろに溶かされる。彼の言うことを何でも聞いてしまいたいことになる。

高柳さんつて、実は魔性の男なのかな。

「僕に教えてくれますか？ あなたの……全てを」

「――はい」

それでもいい。どちらにしても私の答えは一つだけだ。これが夢なら、さめないで。

ゆらゆら、ゆらゆら。

心地よい振動と、子守歌みたいなエンジン音。今はタクシーの中で、私の隣には高柳さんが座っている。

彼はジッと窓の外を見ていて、私もつられて外を見た。まるで夜はこれからだというように、辺りはきらきらしたネオンで輝いている。

やがてタクシーが静かに停まったところ、それは都内の大きなホテルだった。いかにも高級そうな佇まいは、明らかに一介のビジネスホテルではない。

高柳さんは運賃の支払いを済ませると、私に微笑みかけて手を貸してくれた。酩酊の心地よさが途切れないまま、彼の手を取る。……本当にお姫様になったみたいだ。信じられない。

ゆらゆらした頭で、彼に手を引かれてホテルに入る。フロントで手続きを済ませてエレベーターに乗り、目的の部屋へと向かう。

高柳さんはあらかじめこの事態を想定していたかのように、全ての行動がスマートだ。でも、大人の男の人というのは、こんなものなのかもしれない。ふらふらしている私と違って、彼の足取りはしつかりしていた。

ずっと見ても飽きないほど整った顔立ち。上品に横分けされた茶色がかった髪。すらりとした長身……おまけに彼は、大企業の社長令息なのだ。

そんな人と一緒にホテルに入っているなんて。しかもそれが、憧れの人だなんて。

きつと、これが幸せの絶頂というものなのだろう。恋を諦めなくてよかった。勇気を出してよかった。

部屋のドアが控えめな音を立てて開かれる。高柳さんと一緒に中へ入ると、そこは普通のホテルの部屋とは明らかに違っていた。

ワンルームではあるけれど、面積がとても広い。ベッドは二つ。そしてくつろげそうなソファが二つ、向かい合わせに配置されていた。

ぼうっと部屋の中を眺めていた私の手が唐突に引かれる。驚いたのも束の間、体をベッドに倒された。間髪を容れずに高柳さんがのしかかってきて、至近距離で見つめ合う。

どきんと心臓が跳ね上がった。

——え、もうしちゃうの？　そういうものなの？　まだシャワーも浴びていないのに、こういう時は問答無用で始めるものなの？

全てが初めてで、何が何やらさっぱりわからない。ただ間近で見る高柳さんに、ひどく緊張していた。今まで仕事上の付き合いしかしてこなかった彼が、こんなにも近いところにいるなんて。高嶺の花のはずなのに、その花は目と鼻の先にある。

嘘かまことか確かめるように、私はそつと高柳さんの頬に触れた。すると、彼は優しく目を細める。

「——君は、本当にうかつな子だな」

え、と声が出た気がした。うかつ……うかつって、どういうことだろう？

「忠告しておこう。男と二人きりで飲む時、勧められた酒を飲んではいけない。こんな風に捕らわれた時、逃げ出すことができなくなるからな」

……目の前の男は、ニヤリと笑った。

まるで冷や水を浴びせられたみたいに、酩酊めいてしていた頭が少しずつ冷静になっていく。でも色々と思考が追いつかなくて、私はただ目を丸くしていた。

「油断大敵だぞ。でも、君みたいな子は嫌いじゃない。愚かおろかで可愛いと思うよ。こういう時、無駄に身持ちが堅いとかえって興ざめだからな。……ところで、いつまでそんな間抜けづち面をしている」
彼は呆れたように顔をしかめ、未だぼかんとしている私のおでこをピンツと指ではじく。

——それで、私の意識ははつきりした。

「まあいいか、では、さつそく——」

「ちよちよつ、ちよつ、ちよつと待てー！」

私の服を脱がしにかかった彼の手首を、慌てて掴つかむ。止められたことに苛いら立ちを覚えたのか、彼は「何だ？」と機嫌の悪そうな声を出した。

いやいや待ってよ。これは何？ 何が起こっているの？

こんなの高柳さんじゃない。私が好きになった、優しく王子様で誰に対しても丁寧でジェントリの塊かたまりみたいな爽さわやかな笑顔が似合う、あの高柳さんじゃない！

「あなたは誰!？」

私の渾身こんしんの問いかけに、彼は目を丸くし、そしてぶつと噴き出した。

「君の目は節穴か？ 自分で誘ったくせに」

「だって、だって、おかしいでしょ！ 高柳さんはこんな感じじゃなくて、もつと優しく、紳士ぶ……！」

「ああ、すまないね。君には遠慮する必要がないと思ったもので。——それとも、こっちのほうがよかった？」

私にのしかかったまま、ニコリとあの優しい笑顔を見せてくれる。しかし次の瞬間、獲物を前に舌なめずりする狼のような、凶悪きょうあく極まりない笑みに変わった。

「——だつ、騙だましてたのね!？」

「騙だましたつもりはない。人の上うわつ面づらしか見ていなかった君が悪い」

「そんなことない！ だって会社の人、皆騙だまされてるもん！」

「世の中には物事の表層しか見ることのできない、憐あわれな人間がたくさんいるんだな」
何だこの男、どんだけ上から目線なんだ。

私が非難の言葉を必死に考えている間に、高柳さんの顔をしたひどい男が、ときばきと服を脱がしにかかる。私は身をよじってうつ伏せになり、必死に逃れようとした。

「やつ、やだ、こんなはずでは！」

「どんなはずだったんだ。優しく紳士的に、薄っぺらい愛の言葉でもかけてもらいたかったのか？ おい、逃げるな」

「逃げるわ！ ——私、失礼させていただきます。今日のことはなかったことにして、全て白紙

に……ひゃああ」

ふうっと耳に息を吹きかけられた。へなへなと脱力した私はベッドの真ん中に戻されて、くるりと仰向けにさせられる。

なぜか抵抗がしづらい。頭ははつきりしてるのに、体がひどく重くて大地が揺れて……
「体を動かすのが億劫だろう？ 当たり前だ。あれだけキツイカクテルを二杯も飲んだんだから、よほど酒に強くなければ普通そうなる」

「キツイ……カクテル？」

あの、甘くておいしくて、コクコク飲めるようなカクテルが、そんなにキツイの？ ビールよりも全然アルコールが弱そうだったのに。

「あからさまなキラーククテルを勧めたというのに、君は無警戒でかばかば飲んでいたな。あの時点で、君は愚かだと思った」

「愚かって、ひどい」

「二杯目も有名なキラーククテルを頼んでみたが、君はまったく気にすることなく飲んでいて。……まったく。バーに男を誘うなら、カクテルの知識くらいつけておけ。バカだな」

バカって言った！ 愚かの次はバカって言った！

実はめっちゃくちゃ口が悪くてひどい性格をしていた高柳幸人は、するすると私の服を脱がしている。抵抗しようとしたら、私の両手首は彼の大きな手によって簡単に拘束された。そのまま頭上に持ち上げられ、カーディガンを使ってギョツと縛りつけられる。

「そんなもので縛らないでよ！ 服がのびるーっ！」

「この期に及んで服の心配をするとは、ずいぶんと余裕だな」

フンと鼻で笑うと、彼は乱雑な仕草でスーツの上着を脱ぎ捨てた。そしてネクタイをしゅるりと取り、ワイシャツの袖口のボタンを外す。

そして軽く腕まくりをし、上半身がブラのみになった私の腰に両手を添えてきた。

「ひえっ」

「色気のない声だな」

悪態をつきながら、するすると上に向かって撫でられる。ぞわぞわした感覚が体中を走って、私はあと息を吐いた。

「腰に力が入らないだろう？ アルコールで潰したのだから当然の話だ」

「げ、外道！」

「カクテルの種類もろくに知らないくせに、背伸びしてバーを選んだ君が悪い。勉強になってよかったな？」

ああ言えばこう言う。この男には、どんな悪口も効かない気がする。

そんな会話をしているうちにブラのホックがぶつんと外され、軽く上にずらされた。

「……なるほど」

彼は何やら納得したように吹き、ニヤリと厭な笑みを浮かべる。何だ、思ったよりも小さいとでも思っているのか。

寄せて上げるブラで必死に周りの肉をかき集めているので、元々の胸はさほど大きくない。この貧相な体を見てヤル気をなくしてくれればいいのに。

「あっ！」

思考もそこそこに上ずった声が出てしまった。彼がふわりと胸を掴んできたのだ。柔らかさを確かめるように手のひらで揉み、ゆっくりと捏ね始める。

びくびくと体が震えた。抵抗したいけど、両手は縛られているので動かせない。

上にのしかかっていた彼はスツと体を屈め、私の首筋に舌を這わせた。

「は、あ……っ！」

温かくてぬめった舌が、首筋を伝って耳元まで上がってくる。そして耳朶に吸いつき、細く尖った舌尖で耳のフチを舐めてきた。

ぞくぞくした感覚が体中を襲う。息遣いが荒くなって、頭の中がぐらぐらした。酔っぱらった体はひどく重くて動くのも億劫なのに、不思議と気持ちよさだけは鋭敏に脳へ伝わってくる。

ヤツの表情は妙に冷静だった。ニヤニヤした笑みは浮かべているものの、私が乱れる様を楽しそうに観察している。

私は悔しくなって、ぐつと奥歯を噛んだ。変な声を出して、彼に馬鹿にされたくない。

体中に力を入れて唇を引きしめていると、彼は「ふうん？」と面白そうに笑い、耳朶に軽く噛みついてきた。

びくつと大きく体が揺れる。ちろちろと耳を舐めながら、彼は手を淫らに動かす。そして胸を捏

ねていた指で、つんと頂をはじいてきた。

「あっ！」

初めての感覚に大きな声上がる。しまったと思ったけれど、遅かった。

私の口に、彼が人差し指を挿し込む。くちゆくちゆと音を立て、口腔をかき回す。

——ぐりりと、頂を強くつねられた。その甘すぎる感覚に上ずった声が出る。

「ふ、ああ、やあ……」

指が入っているから、口を閉じることができない。手はおろか口でも抵抗できないようにされて、私は彼の思うがままにはしたくない声が上がった。

「最初からそうやって素直に声を出せばいいのに。……まあ、抵抗されるのは嫌いではない。いじめがあるからな」

クックツと笑って、ヤツが身を起こす。ようやく口から指が抜かれ、私はキツと彼を睨んだ。

「最低！」

「どうとも言え」

ふつ、と小さな音を立ててスカートのホックが外された。白のフレアスカートをすると脱がされ、ストッキングもショーツごと剥ぎ取られてしまう。

ものすごく手慣れている。とんだ遊び人だ。自分の中にあつた高柳幸人のイメージがガラガラ音を立てて崩れていく。

「悔し……」

ぎゅっと目を瞑^{つぶ}って声を絞り出した。

会社での姿は全部嘘だったのだ。あの優しい笑顔も紳士的な言動も上^うつ面^づのものだったのだ。それなのに私は今日こそ勝負しようと、ウキウキしながら服を選んだり頑張ってお化粧したり。髪もきれいに巻いたし、マニキュアだつて何度も塗り直して完璧に自分を仕立て上げていた。

そのオチがこれだなんて。自分自身が情けなくて、じわりと涙^{なみ}が滲^じむ。

「いいな、その顔は」

彼がふっと笑う。そして私の頬をゆるやかに撫でてきた。

「悔しさを口にしながらも俺を睨^{にら}みつける、その表情は好ましい。すぐに諦める人間はつまらないからな。会社での君は毒にも薬にもならんという印象だったが、意外と勝気な性格をしているようだ」

まさに言いたい放題だ。というか、あんなに人のよさそうな笑顔で私に話しかけておいて、腹の中ではそんなことを考えていたのか。

彼は楽しそうに笑い、親指で私の目尻をぬぐう。

「いくら悔しかろうとも、君を解放するつもりはない。俺の本性を知^おったからには、覚悟^{おぼ}してもらうぞ」

目を細めた彼は私に馬乗りになり、腕時計の留め金をぼちりと外す。

「わ、私は知^しりたかつたわけじゃない。あなたが勝手に見せてきたんじゃない！」

「だが、俺の領域に足を踏み入れたのは君だ。虎穴^{こけつ}に入ろうとしなければ、こんなことにはならな

かつたのに。いや、この場合は藪^{くさ}をつついたという表現のほうが正しいのかな？」

腕時計をベッドのカウンターに置きながらくすくす笑うと、私を檻^おりに閉じ込めるように覆^おいかぶさり、枕元に両手を置いた。

「単なる会社の同僚なら、君に興味を持つことはなかった。そんな俺に興味を持たせたのは、他ならぬ君自身だ。……おかげで、欲しくなっちゃった」

徐々に近づいてくる。優しく王子様みたいで、でも本性はまったくそうじゃなかった男の顔が――

静かに唇が重なる。小さな水音が耳に届く。

初めてのキスに、私は目を丸くした。

すぐに唇が離される。だけど間髪^{かんは}を容れずに二回目のキスが落とされた。少し角度を変えて、唇と唇がぴったりと重なるようにした、深いキス。

息苦しさに目を瞑^{つぶ}る。拘束された手首にぐっと力を入れると、彼はそこに手を添えてきた。あやすように柔らかく握って、もう片方の手を背中に回してくる。

唇をゆっくり滑らせるようなキスが終わって、息を継ぐ間もなく再び唇が重なる。そして、何かとろりとしたものが入り込んできた。

「んっ、んーっ!？」

私は焦って身をよじる。しかし彼の腕がしっかりと腰に巻きついていて、ほとんど身動きが取れない。

温かくてとろとろしたものだ。それは間違いなく彼の舌だった。彼は暴れる私の体を押さえつけ、ぬるりとした舌で口腔を犯していく。

奥のほうに縮こまっていた私の舌を探り、ゆつくりと味わうように交わらせた。舌尖でくすぐられ、ぬるついた舌同士が絡み合う。

いたわるように。いつくしむように。

私を力ずくで押さえているにもかかわらず、彼の舌の動きはひどく緩慢で優しい。

「……鼻で息をするんだ」

彼は唇を少し離して、そんなことを呟く。私の反応から、キスが初めてなのだ気づいたらしい。それに私が応える前にキスの続きが始まり、舌を軽く吸われた。

「はっ、ん」

鼻で息をしると言われても、それだけではちよつと苦しい。だけどそれ以上に、私は自分自身の変化に戸惑いを感じていた。

ちゅ、と音を立てて唇が離されると、少しだけ寂しくなる。唇が再び合わさると、ホツと安堵した。

ゆつくりとして柔らかな舌の動き、とろけるような舌同士のまぐわいが、私の体をみるみるうちに弛緩させていく。まるで、体中が彼にとろかされたみたいだ。

彼は私の背中に腕を回したまま、頬を優しく撫でてきた。

どうして……こんなに優しくしてくれるのだろう。

彼は私が欲しくなったと言っていた。だから優しくしてくれるの？ それとも、これがいわゆる「キスがうまい」ということなの？

全てが初めてなので、よくわからない。ただ、温かい湯船につかっているような心地よさと、くらからする酩酊のせいだ、うまく思考が働かなかった。

「経験が少なそうに見えるが、もしかして初めてなのか？」

彼が音もなく唇を離し、至近距離で聞いてくる。私は小さく頷いた。

「そうか」

ふつと彼の目が細められる。今のは笑ったのだろうか。

「処女をいただくのは、さすがに想定外だったな。だが、それすら欲しいと思う。こういう緊張感

は、思ったよりも悪くない」

「何それ……どういうこと？」

「君の大事なものをもらうのだから、責任も相応だということだ。君だけでなく、俺も覚悟するべきだろうか？」

「はっ、ん」

「君の大事なものをもらうのだから、責任も相応だということだ。君だけでなく、俺も覚悟するべきだろうか？」

彼はにっこりと微笑む。だけど私はまだピンとこなかった。

「どういうことだろう？」

私の初めてと彼の責任。そして覚悟。

酔っている頭を必死に働かせる。やがて言葉の意味を理解した私は、目を大きく見開いた。慌て

て身をよじらせ、手足をばたつかせる。

「ちよつと待って！ 私、そこまで考えてない！ そういう覚悟とか責任とか、結構ですからっ！」

「俺から逃げられるとでも？ ははは、安泰な生活が約束されてよかったじゃないか」
「あんたの性格が最悪な時点で、まったく安泰じゃないし！」

冗談じゃないと思いつながら反論すると、高柳幸人は少し驚いたように目を丸くした。

「ほう？ 君は俺の背後にあるものよりも、俺自身を見ているのか。それはそれは——嬉しいことを言ってくれる」

二、と彼は凶悪な笑みを浮かべた。会社にいる時の爽やかな笑みとは程遠い、悪人そのものの笑みだ。

「あ、あなたを喜ばせるようなことを言った覚えはないのですが」

「さらには無自覚ときたか。いや、今まで手つかずだったのは奇跡だな。本来、君のような女は早く売れていく。俺はなかなかの『当たり』を捕まえることができたようだ」

高柳幸人はわざと主軸をずらしたような言い方をしている、いまいち要領を得なかった。だけど早く売れるだの当たりを捕まえただの、あんまりいいことを言っているようには思えない。

ムツとして彼を睨むと、「そう睨むな」と笑われた。

「俺は純粹に喜んでるんだ。君にとって大切なものは俺の所有物ではなく俺自身なのだ、君の告白は嘘偽りのないものだったとわかったからな」

彼は私の頬を挟み込むように両手で触れ、目と鼻の先でそんなことを言ってきた。

「あ、あの告白は……そのう……」

あくまで表向きの高柳幸人に惚れた私としては、全力で撤回したいところなのだが、彼の表情が

あまりに幸せそうだから、つい言葉尻を濁してしまう。

そんな顔をしたくないでほしい。なぜか私まで嬉しくなってしまうのではないか。

彼はくすりと笑い、唇を優しく重ねてきた。何度も交わしたキスのせいか濡れていて、少し冷たい私の唇に、生温かい舌が這う。舌先でちろちろと舐められるのは、ちよつとくすぐりたい。だけど、不思議と気持ちよかった。

「できる限り、優しくする」

ぽつりと呟いた彼の舌が、唇から顎に伝い、首筋を通っていく。

震えるほどの快感に、知らなかった興奮。

大きな手が私の体を艶めかしく撫で、胸からお腹、そして下腹部へと向かっていく。

「あ……」

彼の手がどこに行き着くのか、私は本能的にわかっていた。制止の声を上げそうになったところで、唇をふさがれる。

それは噛みつくとか無理矢理とか、そういった感じのものではなくて、ひどく優しいものだった。彼は怖がる私をなだめるように、極めてソフトな口づけを落としてくる。

だからだろうか——。私の反抗心はみるみるとしぼんでいき、彼の唇に体を委ねてしまう。

そこで彼の指先が、スツと繁みに分け入った。

初めて許してしまった男性の指。硬くて、自分のものとは違う他人の手の感覚に、どうしても体中が緊張する。くちりと音を立てて秘裂が開かれ、外気に触れてひやりとした。

「少し濡れているな」

彼が笑い、指先でするりと内襲うちせきを撫でてくる。途端に総毛立つような感覚に襲われて、私は「ひゃあっ！」と大きな声を上げてしまった。

彼は耳元で「怖がるな」と咳き、耳みみたぶにキスをしてくる。そのまま食はみ、尖らせた舌尖でぬるりと耳のフチをたどった。

体中がざわざわして、息遣いはあえぐようなものに変わる。抗あらがえない気持ちよさに、思考の数々が散らばっていく。

ちゅ、とリップ音を鳴らして肩にキスを落とした彼は、そのまま舌を這はわせ、胸まで下りてきた。そして胸の頂たてにゆっくりと口づける。

「ああっ！」

びくびくと体が戦わ慄ないた。

それは今までに感じたことのない甘い感覚。何物にも代えがたい快感は、私の体をいとも簡単に支配してしまう。

彼の思いのままに声が上がって、体は震えた。頂たてを甘く噛み、舌尖で捏こねくり回されるたび、私の中から冷静さが失われていく。何も考えずにただこの時を悦よろこべと、体が訴えてくる。

彼は胸の頂たてを舌でいじりながら、指で秘所を探り始めた。生温かく、とろりとしたものが蜜口からこぼれる。それを彼が指でぬぐい取り、内襲うちせきに優しく塗りつけていく。

「ん、……ふ、あ」

胸の頂たてを舌でいじられ、秘裂を指でいじられ、どこに意識を集中させればいいのかわからない。私の体はまさしく翻弄ほんろうされていた。

「やっ……、あっ……んっ」

彼が私の体に触れ、舌で舐めるたび、拘束された手首にぎりぎり力が入る。抵抗すら許されない状況で、性の快楽が否応いやおうなしに襲ってくる。

「ひゃっ……」

唐突に、ぐいと足を持ち上げられた。それは彼の肩にかけられ、大きく開かれた秘裂の中に人差し指を挿し込まれる。くちゅりと淫みだらな水音がして、恥ずかしさに目をぎゅっと瞑つぶってしまった。

「反応が初々はつはつしいな。顔を真っ赤にして、実に可愛い」

「んっ……か、可愛い、なんて……」

「本当に、君のような女が売れ残っていたことに驚きを隠せない。相手に経験があるとかないとか、今まで気にしたこともなかったが……君の反応はいいな。くせになりそうだ」

彼が身を屈めたかと思えば、胸元にチリツと痛みを感じた。

「やあっ……」

思わず目を開けると、胸元に赤い痣あざがついている。彼はお腹の辺りにも唇を落とし、もう一つ赤いしるしをつけた。

「君が恥ずかしがるどころを、もっと見てみたい」

彼が顔を上げ、私と目を合わせてニヤリと笑う。その目には不思議な感情が浮かんでいた。

何だろう……愛情に似ている気もするけれど、もつと禍々しい。

あえて言葉にするなら、執着、だろうか。

彼は私と目を合わせたまま、蜜口に入れた指を動かし始めた。ゆつくりと奥へ挿し込み、関節を軽く曲げる。それだけで圧迫感が急激に大きくなり、私は思わず身を震わせた。

「はっ、あ……！」

く、と体がのけぞる。自然と顎が上がつて、カーデイガンで拘束されたままの手をぎゅっと握りしめた。足は彼の肩にかけられている上、しっかりと片腕で固定されているので、動かすことができない。

「ん、んんっ……」

逃れることも抵抗することも許されず、膣内を指でかき回された。少し緩急をつけたような動きで、関節を曲げたまま、指が蜜口から出し入れされる。

「やつ、……ああっ！」

彼が指を動かすたび、ぐちゅ、ぬちゅ、と耳を覆いたくなるような恥ずかしい水音が聞こえてくる。それは紛うことなく私の体から分泌されたものだった。

官能によつて秘所が潤うことは、性知識の乏しい私でも知っている。でも、実際に体が、うなると、こんなにも恥ずかしいのだと思い知った。

「よく濡れる。君は感じやすいんだな」

ふふ、と高柳幸人は楽しそうに笑った。馬鹿にされたように感じて、私はぶいと横を向く。

「なぜ拗ねるんだ。褒めたのに」

「んっ……ほ、褒めてない……何か、やらしいって言われたみたい……」

「いやらしいのは悪いことなのか？ 俺にとつては喜ばしいんだが。感じているということは、それだけ俺に心を許していることだろう？」

彼は目を細め、私の膣内に埋めた指をくいくいと動かした。たった一カ所をいじられているだけに、体中が痺れたみたいだ。戦慄く。

「は、あ……っ！ そ、そういう……もの、なの？」

「俺としては、そうであつてほしい。さすがに一方通行は寂しいからな」

彼は少し切なげに微笑む。酒で酔い潰して、半ば無理矢理コトを始めようとしているくせに、その笑顔はすうい。彼の本性を知つて驚く気持ちはもちろんあるけど、だからといって嫌いになつたかといえばそうでもないのだ。

まだ好きという気持ちは残っている。だからこそ、絆されそうになってしまう。彼になら体を許してもいいかな、と思ひ始めていた。

こんな風に体を触られているにもかかわらず、助けを呼んだり嘔みついたりしていないのがその証拠だ。そんな私に、自分を受け入れてほしいとでも言いたげな笑顔を見せないでほしい。

「ばか……」

横を向きながら呟く。どうせなら無理矢理すればいいのに。そうしたら私はきつぱりと恋心を断てるのに。彼は妙に優しいから、心が揺れる。

いたわるような口づけと柔らかい愛撫は、私が初めてだからその気遣いなの？ それとも、本当に私が欲しいから優しくしているの？

わからない。わからないまま、体だけが彼の好きなように暴かれていく。彼の望み通りに、秘裂から蜜がとろりとこぼれる。

「ひ、ああ……」

私の頭が混乱する中、彼は秘裂を大きく開いてきた。そして少しスピードを上げて、人差し指を抜き差しする。くちゆくちゅという水音が激しくなり、膣壁を擦る指の感覚に自然と声がかかる。

「あ、ああっ！」

彼は静かに唇を重ねてきた。指の抽挿がさらに速まり、声が出せず手足の自由も利かないまま、ただただ快感だけが絶え間なく続く。

抗えない、というのは不思議と興奮した。私にそういう趣味があるとは思っていないけど、なぜか余計に気持ちがいいと感じてしまう。

それがバれるのが嫌で、恥ずかしくて、唇に意識を集中させた。口腔を犯してくる彼の舌に応え、たどたどしく自分の舌を動かす。

「はっ、はあ……は、ん」

「……一生懸命なところが、たまらなく可愛いな。拙いのもいい。……これが、落ちるという感覚か」

ふ、と彼が笑った。落ちるとはどういうことだろうか？

「そろそろ挿れるぞ」

カチャリとベルトの留め金を外す音が聞こえる。彼はストラックスのポケットから避妊具を一枚取り出し、びりつと袋を噛みちぎった。

ずいぶんと用意がいい。……ぼんやりとしながら、そんなことを思った。

彼は片手で自分のものに避妊具を取りつけ、ニヤリと笑う。

「色々と考えの足りていない君が、こんなところだけ準備万端だとは思っていない。だから、ちゃんと自分で用意していたよ」

「うう……」

「中にはそういうことも含めて計算ずくの人間もいるが、君は違うからな」

にっこりと、彼は満面の笑みを見せてくる。腹が立つけど、その笑顔はまぶしいほど格好いい。

「俺でよかったな？ 他の男はこんなに優しく扱ってくれないぞ。初めての相手が俺だったことに感謝するように」

「どの口が言うか……！ ん、ああっ！」

悪態が悲鳴に変わる。彼のものが問答無用で挿入ってきたからだ。硬くて、指とは比べ物にならないほど存在感のある、大きなものが。

「は、あ……っ」

指で慣らされた膣道を、ソレがずむずむと進んでいく。ズリツと引きつるような痛みを感じて、目にしわりと涙が浮かんだ。

——これが、初めての痛みなのかな。

「くっ、あ、いた……あっ……」

「最初はどうかやっても痛む。できるだけ、ゆっくり動くから」

「うん、だいじようぶ……まだ、あ、んっ」

体が痙攣するみたいにびくびくと震える。最奥まで挿し込むと、彼はようやく息をつき、ぎゅうつと私を抱きしめた。

否応なく感じる体内の異物に、意識の全てが集中する。思わずぐつと下肢に力を入れると、彼がわずかに顔をしかめた。

「……っ、初めてのわりに、啞え込むのがうまいな」

「んっ……え？」

「無自覚か。まったく。抜けているように見えて、こういうところだけは魔性を感じるな」

ふ、と微笑み、彼がゆつくりと身を引く。ずるずると抜かれていく杭が膣内の粘膜を擦り、体が勝手に強張る。

「っ……」

やがて全てを引き抜いた彼が、再び先端から侵入してきた。えらの張ったところが狭い蜜口を広げ、にゅぷりと挿入ってくる。

「ふ、あ……あっ」

ひときわ太い部分が、入り口の浅いところを何度も往復する。甘い痺れと、ジリジリと蓄積され

ていく快感。たまらなくなつて、嬌声が次第に大きくなっていく。

「あんっ、あ、ふあっ……!!」

彼は私の腰を抱き、その行為を続けた。焦らされて、切なくなつて、私は懇願するように声を上げる。

「や、たか……やなぎ、さん、おねが……っ」

「こういう時は、名前を呼ぶものだ」

「……幸人さんっ、お願いだから、ちゃんと、して!」

はあつと息を吐きながら、はしたない願いを口にする。——私は一体、何を言っているんだろう。彼は意地悪そうに目を細めた。そして片手で私の蜜口を広げ、ぐりりと杭を埋めてくる。容赦なく、乱暴に、ぐつと最奥まで貫かれた。

「ああっ!」

私の喉から高い声上がる。体が弓なりになって、びくびくと震える。

彼は私の腰を強く掴み、スピードに乗って挿入を始めた。柔肉を擦り、狭い膣道をこじ開けるように往復し、最奥をぐつぐつと突いてくる。

「く……はっ、ああっ!」

それは暴力的なほど甘い快感。嬌声はやがて声にならない悲鳴になり、私は目をぎゅつと瞑って縛られた手を握り込む。

自分の体じゃないみたいに、がくがくと揺さぶられた。頭がぐらぐらして、カーディガンがきし

んだ音を上げる。

「あ、だめ……っ、ゆきと……この手、外して……っ」

もっと感じたい。彼に触れたい。一緒に快感を追い求めたい。そんな気持ちでいっぱいになって、私は強く懇願した。

高柳幸人は抽挿を続けながら口元をゆるめる。そして私の手首を拘束していたカーディガンをしゅるりと外した。

自由になった私は思わず彼を抱きしめる。頭で考えたわけではなく、本能で求めるように体が動いていた。

ごっ、と最奥まで貫かれる。そのまま付け根をぐりぐりと擦りつけられ、下腹部にきゅう、と痛みを感じた。それは破瓜の痛みとは違って、ひどく鈍い痛みだ。気持ちよさが混じった痛みとか、喜びにも似ている。

「あ、やあ、んんっ……」

彼の表情が、余裕のないもの変わっていく。腰の動きも一層乱暴になって、私を気遣うよりも自分自身の快楽を求めるもの変わっていく。

「ゆき、と……さ……はあっ……」

「天音……っ」

苦しげな声と共に、性の交わりは唐突に終わりを告げた。

彼はきつく私を抱きしめ、びくりと体を震わせる。膜越しに、白い欲望が勢いよく吐き出される

のがわかった。

とろとろしたまどろみから、ゆっくりと目覚める。見慣れない天井、広いベッド、パノラマの景色が美しい壁一面の窓。

ぼーっとそれらを眺めていた私は、唐突にハッと目を見開いた。

「ここは！」

がばっと起きて辺りをきよるきよる見回す。それと同時に昨晩のことを一気に思い出した。

そうだ。私は、うちの会社の御曹司とホテルで肌を重ねたんだ。それで……

「おはよう」

「ぎゃああ!!」

耳元で朝の挨拶を囁かれ、思わず飛び上がってしまった。振り向くと、そこには笑顔の高柳幸人が寝そべっている。ちなみに全裸であった。

……いや、何と言いますか、体がすごく引きしまってて腹筋も割れてて、コイツは脱いでも格好いいんだな……って、イケメン観賞してる場合ではない!

「わ、わ、私、失礼させていただきます!」

「もう? 君は晴れて俺の恋人になったんだから、そんなに慌てずゆっくりしていけばいいだろう。そうだ、朝食でも頼もうか」

「ええっ、朝食!? ……じゃなくて、恋人とは何を仰っているのか! ハッハッハッ、意味がわ